ポピュラーライブラリーエリア創出の可能性

地域公共図書館における開架フロアのゾーニング手法に関する研究 (1)

A POSSIBILITY OF PLANNING A POPULAR LIBRARY AREA

Studies of the method of zoning an open shelf floor at public libraries (1)

北岡 敏郎*

Toshiro KITAOKA

Both a multiple use and a family use of public libraries have increased recently. The former means that many adults use not only books but also magazines and AV materials, and the latter means that many children use libraries with their family. A series of studies shows that the method of zoning an open shelf floor with a popular library area is more reasonable and effective for those uses. In this method, an open shelf floor is divided into two zones in public libraries. One is an “active zone,” which consists of a popular library area with a children’s area, a newspaper and magazines’ area, and an AV materials’ area. The other is a “quiet zone,” which consists of other adults’ book area with a reference area.

The results of this research are as follows : in most of general 7 public libraries, there is a principle that adults’ books are arranged in order of the class and division of NDC. But the parts of <5.technology & engineering> books are not placed in the order and placed near a children’s area or a newspaper and magazines’ area. Many people use those books on technology and engineering more than other books. Therefore it can be said that some of those books is the core of a popular library.

Keywords: public library, open shelf floor, zoning, popular library, Nippon Decimal Classification, use

地域公共図書館、開架フロア、ゾーニング、ポピュラーライブラリー、NDC、利用

1. はじめに

著者は、これまで開架フロアのエリア配置構成¹⁾について分析し、近年の図書館利用の特徴である成人の複合利用とファミリー利用においては、一般書エリアと新聞・雑誌エリア及び児童書エリアの配置構成が影響することを指摘した。具体的には、成人の複合利用では、一般書エリアと新聞・雑誌エリアの独立型よりも隣接型の方が一般書と新聞・雑誌の複合利用が促進される²⁾。また、子どもが親と同伴するファミリー利用では、一般書エリアと児童書エリアの切り離し型よりもエリア隣接型の方が子どもと親がそれぞれに主目的利用をする分離利用が促進されることを明らかにした^{3) 4)}。つまり、一般書エリアは、本来的に他のエリアから離れ静かに読書できることが求められる一方で、逆に、これらのエリアと配置の関連性が要求されることになる。

一方、近年、建設される地域公共図書館の蔵書数が増える中で、特に一般書エリアの規模拡大が著しい。しかし、10万冊程度以上に書籍が多くなると、これまでのように一般書エリアとしてひとまとめにするには無理があり、利用上も支障をきたす恐れがある⁵⁾。これを解決するためには一般書エリアの分割は避けて通れない。

先述の相反する二つのエリア配置要求を満たしつつ分割するためには、一般書エリアを他のエリアとの配置の関連性を重視するエリアと、他のエリアから離れ静かに読書ができるエリアで構成することが考えられる。そうすれば、前者は新聞・雑誌エリアや児童書エ

図1 開架フロアの構成モデル

リアなどと隣接してゾーンを形成させ、後者はレファレンスエリアなどと別のゾーンを形成させ得る。前者のゾーンはエリア間の活発な利用が前提であるため、Activeゾーンとし、後者のゾーンは静かに読書や調査等を行うことが目的であるため、Quietゾーンとする(図1)。いわゆる動と静によるゾーニングである。Activeゾーンに配架される書籍は、利用者が多く、かつ、ファミリー利用で同伴する親が利用しやすい書籍や、新聞・雑誌と複合利用しやすい書籍でなければならない。本研究ではこれを「ポピュラーライブラリー」と呼び、これが配架された書架及びその周辺や付属した読書スペースを含め「ポピュラーライブラリーエリア」と定義する。

これまで、ポピュラーライブラリーエリアについては軽読書コー

* 有明工業高等専門学校建築学科 教授・博士(人間環境学)

Prof., Dept. of Architecture, Ariake National College of Technology, Ph. D.

表 1 調査対象図書館概要・調査概要

*()は2回目調査時

項目	図書館名	F町立 図書館	M図書館	OM市立 図書館	O市立 図書館	Y市立 図書館	C市民 図書館	K町立 図書館
資料年度(年)		1998	1997	1998	1999	1998	1998	1998
蔵書数(万冊)	一般書+児童書	約10.1	約16.3	約17.7	約17.8	約22.0	約22.3	約26.0
開架冊数(万冊)	一般書+児童書	約5.0(8.9)	約9.8(9.2)	約12.5(15.4)	約9.0(10)	約13.1(不明)	約11.3(13)	約9.3(12)
貸出制限	書籍	8(30)冊/15日	10冊/15日	10冊/15日	5(10)冊/15日	無制限/15日	無制限/15日	10冊/15日
	雑誌	最新号以外	最新号以外	最新号以外	最新号以外	最新号以外	最新号以外	最新号以外
図書館床面積 (m ²)	延べ	2,761	1,587	2,203	1,586	2,873	2,113	1,982
	開架フロア	815	936	1633	483	950	1078	1102
	一般書エリア	310	296	570	264	423	456	335
市民1人当たり貸出冊数(冊/人)		11.1	8	4.1	7.9	9.5	8.3	17.3
調査年・月日	第1回調査	93.09.12	93.9.26	94.05.22	93.09.19	95.11.19	93.10.24	93.11.21
	第2回調査	98.11.8	97.11.23	97.11.16	98.11.15	97.11.30	97.11.09	98.11.01

ナーとしてブラウジングエリアと混同して解釈・提案されてきたものが多かったが⁹⁾、現在は一般的に「軽い資料を気軽に座ってくつろぎながら軽読書する」ところと認識・紹介されている⁷⁾。ところが、そもそも資料に軽・重があるのかという議論や我が国の地域公共図書館の蔵書は専門書が少ないので軽読書コーナーをことさら設ける必要性は少ないとする主張があるためか⁸⁾、我が国ではあまり採用されていないのが実状である⁹⁾。これらの是非はともかく、状況を打開するためには、利用者要求に裏付けられた新たなポピュラーライブラリーエリアが求められる。

以上の認識を踏まえ、本研究は、新しくポピュラーライブラリーエリアを創出して地域公共図書館の開架フロアをゾーニング手法により再構築することの妥当性と有効性を明らかにするものである。

対象とする図書館は、蔵書数10万冊前後から30万冊程度の中規模館である。というのも、この規模程度が現在最も一般的になりつつあること、従来(1970～80年代)の5万冊程度の図書館では書籍の貸出機能中心の平面計画が求められたが、この規模になると資料の種類や数が多くなり、前述の如く利用は多様化し、加えて滞在型化した利用にも対応した平面計画が求められるからである。

一方、対象外になるが、近年の大規模図書館の中にはポピュラーライブラリーエリアが設けられているものが散見され¹⁰⁾、先述の如く、蔵書規模が大きくなると一般書エリアを分割せざるを得ないことの証左である。これらのポピュラーライブラリーは専門書部門あるいはレファレンス部門に対応するものとして位置づけられたようであるが、中にはポピュラーライブラリーの規模が10万冊を越え中規模館に匹敵するものもあり、本論で定義したポピュラーライブラリーエリアとは質的に異なる。

研究の課題と方法：一般に我が国の書籍分類はNDC(日本十進分類法)に基づいており、地域公共図書館においても例外ではない。ところが、この分類は主題別と言いながらも学問分野別の分類であり、大学図書館では有効であり得ても、こと地域公共図書館の利用実態には合わないことがたびたび指摘されている。したがって、NDC分類でどのように配架するかが問題である。特に、近年の図書館利用の特徴である複合利用やファミリー利用に対応させるために、図書館側で何らかの配架の工夫がされていてもおかしくない。そこで、本編は、既存図書館の書籍配架においてすでにポピュラーライブラリーエリア形成の萌芽がみとれることを示し、さらに利用実態の分析とあわせて、どのような書籍に注目すべきかを検

討し、ポピュラーライブラリーエリア創出の可能性を追求する。第二編では全国の図書館の配架実態を調べその位置が模索されている状況を統計的に分析し、さらにポピュラーライブラリーとしてどのような書籍が適当であるかを提案する。第三編は実際にActiveゾーンを形成した図書館利用の分析から、提案するゾーニング手法の有効性を検証する。

調査概要：調査対象は、F県内の、中規模で比較的貸出利用が多いごく一般的な図書館を7館選定した¹¹⁾(表1)。調査は、2000年7月～10月にかけて一般書エリアの書籍配架を調べ、配架方針をヒヤリングし、NDC分類毎に蔵書数・年間の貸出冊数を収集した¹²⁾。また、開架書籍は貸出中が多いため、開架冊数のかわりに書棚の長さを測定した¹³⁾。利用人数は、1993年～1998年の休日2日間について開館から閉館まで30分毎に断面調査し、利用者の位置、姿勢、行為等を平面図に記録したデータから一般書エリアの書籍を利用している者のみを取り出し、再集計した¹⁴⁾¹⁵⁾。のべ利用人数は3325人である¹⁶⁾。配架調査と利用者調査の時期に数年の開きがあるが、この間、一般書エリアの書籍配架状況に大きな変化はなく、分析に支障はないと判断した¹⁷⁾。また、10年以上前の利用データであり、現在は、コンピュータ検索機器の普及により、求める書籍が決まっている場合や逆に探しても見つからない場合にそれを利用する者がやや増えてはいるが、依然として、多くの利用者は求める書籍が決まっておらずブラウジングにより書籍を決めていることから、分析結果は現在でも有効であると判断した。

2. 書棚長さの割合

配架の仕方を分析する前に書棚長さの割合をみておく。書棚長さを用いるのは開架冊数の把握が難しいこともあるが、計画論的には利用人数と空間の規模を扱う上で有効な指標になり得ると考えるからである。

NDCの分類は3次区分までなされるが、まず、1次区分の類目は<0 総記><1 哲学><2 歴史><3 社会科学><4 自然科学><5 技術><6 産業><7 芸術><8 言語><9 文学>の10区分である。各科目の中は2次区分の綱目0～9の10区分、また、各綱目の中は3次区分の要目0～9の10区分に分けられる。

このうち科目毎の書棚長さの割合をみると、その割合は各館とも比較的共通している(図2)。具体的には、<9 文学>(文庫含む)は図書館により幅はあるものの約36～44%と最も多く、次いで<

3 社会科学>が約13～16%、<7 芸術>が約9～13%、<2 歴史

>が約8～12%、<5 技術>は図書館による差が最も少なく約7～9%である。<0 総記><1 哲学><6 産業><8 言語>はどの館も6%以下と少ない。この量的な側面の違いは次に述べる如く書籍配架に影響を及ぼしている。

図2 書棚長さ割合

3. 一般書の配架の仕方 (図3)

(1) 共通した配架の特徴

一般書の配架の仕方は図書館により様々であるが、比較的共通にみられる配架の特徴は次の通りである。

①各館とも、NDCの類目毎にまとめその順に配架することを基本としている。各類目は1つの書架の片側を最小単位として配架されている場合が多く、類目の中は2次区分の綱目順、その中は要目順に細分して並べる。この類目順に配架された典型例はOM館とK館

図3 一般書エリアの書籍配架

である。そこまではないが、M、O、C館は隣り合う2～3の類目毎にまとめ、その中は類目順である。また、残りのF館とY館も部分的に隣り合う類目をまとめている。理由は、NDCの分類順に配架するのが最も書籍を管理しやすいからであり、NDC順に配架することが共通の配架原則になっている。

②<9文学>は最も開架冊数が多く書架スペースを広く必要とするため、その位置はカウンターからみて一番手前側か、逆に最も奥の方に位置させる二通りがあり、前者が5/7館と多く、後者はC館とK館の2館である。K館の館長によれば、一般的には手前側におかれるケースが多いが、多くの利用者に建物内を広く利用してもらうために意図的に奥側に配架したものであり、C館は後述するように<3社会科学><5技術>を手前に配架した結果である。

③逆に、<0総記><1哲学><6産業><8言語>は書架1列程度以下であり少ないため、F館の8類、K館の0類のように他の類目同士の関連を優先させて配架されやすい。

④<3社会科学><5技術><7芸術>の類目の配架位置及び方法は後述するように図書館で異なる。

⑤全館とも形態から文庫本はまとめ¹⁸⁾、<9文学>の位置に関係なくカウンターや新聞・雑誌エリア近くに位置させる。

⑥全館とも大型本や全集等の全部ないし一部は壁面や窓下の書架を利用する。そのため、これらを多く含む類目<7芸術><9文学>は書架列の端部など壁面や窓下の書架が利用できる位置に置かれやすい。もちろん、大型本は各類目にあり、数がそれほど多くないため類目毎に書架の最上段や最下段の棚にまとめるのが一般的であるが、<7芸術>は写真集や美術全集等の大型本が特に多いためであり、<9文学>は全集が多く、形態は大きくないが壁面に並べて一望しやすくするためである。

(2) 生活に密着した類目の配架の仕方

ここでは、生活に身近な資料が多い<5技術>¹⁹⁾とそれに関連した<3社会科学>²⁰⁾<7芸術>²¹⁾の配架位置に注目する。

①F町立図書館：カウンターからみて奥の列にNDC順を無視して<3社会科学><5技術><7芸術>を集めて配置するが、その位置は<7芸術>の大型本の窓下配架にあわせ最も奥側に配置されている。ところが、そこはもう一方の壁面が利用できるため、<5技術><7芸術>は壁面の書架にも連続させ、類目の中の後半部分の綱目<59家政学・生活科学>（以下、<59>と略す）や<78スポーツ・体育>・<79諸芸・娯楽>の書籍が一望できるようになっている。館長によれば、<59>は主婦の利用を考え、新聞・雑誌エリアに近づけるための工夫である。

②M図書館：類目0→2、3→6、7→8は順にまとまっているが、グループの配置は不規則である。その中で<3社会科学><4自然科学><5技術>はカウンターからみて最も奥まった所にあるが、特に<5技術>はカウンターから見通しの良い位置で、児童書エリアにも隣接して配架されている。特に、<59>は1箇所コンパクトにまとめられ、児童書エリアへの見通しがよく、ファミリー利用で行き来しやすい位置が選ばれている。

③OM市立図書館：奥の配列は厳格にNDCの類目順であり、他の図書館とは異なり類目毎に近くの窓際にそれぞれの大型本を配架している。類目順の並びの<6産業><7芸術>の間がカウンター正面の最も近い位置になるため、新聞・雑誌エリアの一部を挟んで

いる。そのため、<5技術>は新聞・雑誌エリアに隣接していないが、<6産業>の裏側で、それに近い位置におかれたものである。

④O市立図書館：NDC順に数類目毎にまとめるが、グループ毎の順番は崩して手前側に<5技術><6産業>を配置し、特に<5技術>は児童書エリアに面している。この<5技術>は、5類内の綱目順の並べ方を逆にして児童書エリア側に<59>を配架しており、館長によれば、子ども連れの母親の利用を意識したものである。

⑤Y市立図書館：奥からNDC順に1→3と並び、横に折り返して4→6と配置するが、後者の列の<5技術>の書架間にわざわざ<3社会科学>の一部を挟み「技術と暮らし」のコーナーとしている。館長によれば、利用頻度が多く関連して利用される書籍を近づけるためである。

⑥C市民図書館：NDC順の並びを0→2、3→4、5→6、8→9と隣り合う類目毎にまとめた配架であるが、これらのグループの配架順は不規則である。しかし、入口に最も近い方で新聞・雑誌エリアに隣接した位置に<文庫>とともに<3社会科学>と<5技術>がくるように配置し、資料相互の関連性を重視するとともに、特に<5技術>は、O館と同様に類目内の綱目順の並べ方を逆にして、<59>を最も新聞・雑誌エリア近くに配架している。

⑦K町立図書館：文庫本を除くとカウンターからみて奥の方へ1→3、4→8の2列配置であり、<5技術><7芸術>もこの中に含まれている。しかし、この書架列とは別に窓下や壁面の書棚に<5技術><6産業><7芸術>の一部を綱目・要目で取り出し混成させた「暮らしの本棚」コーナー²²⁾があり、<59>の全部と<79諸芸・娯楽><62園芸>の一部から成る。館長によれば、主婦が利用しやすいようにまとめたものである。また、それとは反対側の位置に<3社会科学>の一部（主に<36社会>）を取り出し、高齢者など「暮らしと福祉の特集」コーナー²³⁾を設けている。7館の中では唯一、類目単位ではなく綱目・要目単位に取り出したものである。

以上より、1) <5技術>は、NDC順の配架を遵守したOM館を除く残り全ての図書館で、NDCの類目順を崩しても児童書エリアや新聞・雑誌エリアに近づけないしは隣接させたり、あるいは他類目との資料相互の関連性を考えるとといった配架の工夫がみられる。<3社会科学>はK館のように一部の資料で独自にコーナーを形成している場合もあるが、むしろ、Y、C、F館のように<5技術>との資料相互の関連性からの配架が多い。<7芸術>は、前述の大型本の壁面配架要求を満たしつつ、可能であればF館やOM館のように<5技術>の隣りや新聞・雑誌エリアに面させている。つまり、配架の工夫の中心は<5技術>と考えてよい。

2) <5技術>の中で、配架の工夫の主対象は<59>であり、主婦や子ども連れの母親あるいは女性の利用者を意識して、5類内の綱目順の並びを変えてでも児童書エリア（O、M館）や新聞・雑誌エリア（C、F館）に近づけたり、隣接させている。ちなみに、<59>は（家庭経済）、（家庭理工学）、（衣服）、（裁縫）、（手芸）、（理容・美容）、（食品・料理）、（住居・家具調度）、（家庭衛生）、（育児）といった家庭生活に密着した要目からなり、<5技術>の中で最も多く、調査対象図書館では書棚長さで約34～55%を占める。

3) 調査対象図書館の多くは、NDCの類目毎のまとまりを崩さない

ことを前提に＜5 技術＞の類目全部の配架位置を工夫しているが、一方で、K 館のように5 類の配架とは別に＜59＞だけを取り出し関連する他類目の一部とまとめる方法がみられ、ポピュラーライブラリーエリアを創出する際の参考になろう。

4. 利用状況

2 次区分の綱目毎の利用は把握が困難なので、ここでは類目を単位とした利用の状況を利用人数と年間貸出冊数で分析する。利用人数は一般書エリア内の書架周辺で書籍を選択あるいは立ち読みしている人数であり、30 分毎断面の2 日間合計人数である。

(1) 利用人数

類目毎の利用人数割合は各館ともある程度共通しており(図4)、最も多い＜9 文学＞が約28～41%、次いで＜5 技術＞が約12～18%、＜7 芸術＞が約8～20%、逆に利用者が少ないのはやはり＜0 総記＞＜1 哲学＞＜6 産業＞＜8 言語＞であり、ほとんどが5%以下である。このことだけみれば、おおまかには書棚長さの割合と同様の傾向を示し、書棚長さに比例した利用人数と考えられるが、その中で＜5 技術＞だけはどの図書館でも書棚長さの割合より利用人数割合の方がかなり多い。つまり、＜5 技術＞は配架スペースは少なくても利用は多いことを示している。そこで利用効率をみるため

図4 利用人数割合

図5 利用人数比

に、利用人数割合と書棚長さの割合の比、つまり、書棚の単位長さ当たりの利用人数比(類目毎の単位長さあたり利用人数/全体の単位長さあたり利用人数、以下、利用人数比)を考える。利用人数比をみると(図5)、書棚長さの割合が小さい類目＜0、1、6、8＞は値がやや大きくなる傾向は認められるものの、O館の＜8 言語＞を除き²⁴⁾、＜5 技術＞以外の類目は1.4 以下で、その大半は1.0 前後以下、すなわち、書棚長さに応じた利用人数がそれ以下が多い。それに対し、＜5 技術＞だけは1.5～2.6 と大きく、前述した利用効率の高さを裏付けている。その中で、K 館とF 館では2.4、2.6 と他の図書館の1.5～2.1 より特に大きく、窓下や壁面に配架された効果でもあろうが、NDC 順の配列から取り出され分かりやすいからといえる。このことは、利用人数の側面だけからみれば、一般書の配列から取り出すことでは同じであるポピュラーライブラリーエリア創出の有効性を示唆していると考えられる。と同時に、＜5 技術＞の類目のまとまりを崩さずに配架の工夫をするよりも、綱目＜59＞を取り出す方が利用効率は高くなり得ることを示している。

(2) 貸出冊数

OM市立図書館は貸出冊数統計がなされていないため、それを除く6館で分析する。貸出冊数割合も利用人数と同様の傾向を示

図6 貸出冊数割合

図7 貸出冊数比

し、最も多いのが＜9 文学＞の約 27～42%²⁵⁾、次いで＜5 技術＞約 14～20%、＜7 芸術＞約 7～17%である（図 6）。＜9 文学＞は別格として²⁶⁾、やはり、＜5 技術＞＜7 芸術＞の貸出利用はどの図書館でも多い。貸出効率をみるために先程同様、貸出冊数割合と書棚長さの割合の比、つまり、書棚の単位長さ当たりの貸出冊数比（類目毎の単位長さあたり貸出冊数 / 全体の単位長さあたり貸出冊数、以下、貸出冊数比）をみると（図 7）、O 館の＜8 言語＞を除き、＜5 技術＞はやはりどの図書館とも他の類目より値は大きく、貸出効率が最も高い類目である（唯一、C 館の＜1 哲学＞のみが同程度である）。その中でも＜59＞全部を壁面に配架した F 館が 2.9 と最も大きい、K 館は 2.1 と他館の 1.7～2.0 とそれほど変わらず、NDC 順の配列から＜59＞を取り出し別置する方法に利用人数ほどの優位性はみられないが、さりとて他館より低い値になっているわけではない。

5. まとめ

ごく一般的な地域公共図書館の書籍配架の実態とその利用を分析し、開架フロアに Active ゾーンを設ける際に核となるポピュラーライブラリーエリア創出の可能性について検討した。以下、要約する。

1) 一般書エリアにおいて共通的にみられる配架の特徴は、基本的に書籍を NDC の類目毎にまとめ、できるだけ類目順に配架することである。それができない場合でも、隣り合う数類目毎にまとめて配架する。これは全館に共通して認識されている配架方針であり、配架原則と考えてよからう。その上で、＜9 文学＞、＜7 芸術＞、＜文庫＞などは開架冊数の多さや本の形態及び利用上から、入り口近くや壁面・窓下書架を利用しやすい位置に配架されやすい。

2) 生活に身近な資料が多い＜3 社会科学＞＜5 技術＞＜7 芸術＞において、図書館の配架の工夫は＜5 技術＞が中心であり、NDC の類目順の配架を崩しても、新聞・雑誌エリアや児童書エリアとの関連で配置されているケースが多い。また、＜3 社会科学＞＜7 芸術＞は条件が許す場合に資料相互の関連性から＜5 技術＞近くに配架する傾向が窺われる。

3) 特に＜5 技術＞の中でも、配架の工夫の主対象は＜59 家政学・生活科学＞であり、5 類内の綱目順の並びを変えてでも児童書エリアや新聞・雑誌エリアとの配置の関連性が図られている。ごく一般的な地域公共図書館において、＜5 技術＞とりわけ＜59 家政学・生活科学＞にこのような配架の工夫が窺え、新聞・雑誌エリアや児童書エリアとのつながりが考えられ、実際の利用においても＜5 技術＞は利用効率、貸出効率ともに大きいことから、これらの工夫は提案するポピュラーライブラリーエリア創出の萌芽とみてよからう。また、ポピュラーライブラリー構成の検討に際しては、＜59 家政学・生活科学＞に注目する必要がある。

4) ＜59 家政学・生活科学＞を＜5 技術＞の類目内にとどめるよりも、類目の配架とは別に取り出す方が利用効率は高い。このことは、利用人数の側面から、NDC 順の配架列から取り出し独立させることでは同じであるポピュラーライブラリーエリア創出の有効性を示唆している。

今回はごく一般的な地域公共図書館を対象にしたものであり、全国的にどのように配架の工夫がなされているかの解明が課題であ

る。尚、本研究は平成 13～15 年度文部科学省科学研究費補助金（基盤研究 C (2)）による。

注

- 1) これまでコーナーと称していたが、空間用語としてはいささか不適切であり、欧米で用いられている用語に統一した。
- 2) 北岡敏郎ほか：成人の複合利用からみた公共図書館のコーナー構成とブラウジングについて 日本建築学会計画系論文集 第 486 号 pp.61～68 1996.8
- 3) 北岡敏郎ほか：図書館利用型の構成とその特徴 ファミリー利用からみた公共図書館のコーナー構成に関する研究 (1) 日本建築学会計画系論文集 第 498 号 pp.117～122 1997.8
- 4) 北岡敏郎ほか：＜分離＞利用型の特徴と児童書コーナーと一般書コーナーの配置構成 ファミリー利用からみた公共図書館のコーナー構成に関する研究 (2) 日本建築学会計画系論文集 第 518 号 pp.129～135 1999.4
- 5) 実際、テーマによっては NDC の複数類目にまたがっており、規模が大きくなると書架間の行き来が大変で、混乱している利用者、特に高齢者がよくみられる。
- 6) 北岡敏郎ほか：我が国の公共図書館におけるブラウジングコーナーの概念とその変遷について 日本建築学会計画系論文集 第 509 号 pp.113～119 1998.7
- 7) 例えば、上松貞夫・木野修造：図書館シリーズ 9 図書館建築・施設と設備 - 樹書房 pp.114 1986
- 8) 本田明ほか：図書館員選書 15 図書館施設を見直す 日本図書館協会 1986
- 9) ポピュラーライブラリーを設けた図書館は 1990 年代前半まで 3 例ほどしか知り得なかった（前掲 6）参照。
- 10) 例えば、神戸市立中央図書館、青森市民図書館、市川市中央図書館、横浜市中央図書館などがある。
- 11) ごく普通の図書館においてさえどのように配架の工夫がありうるか、つまり、質的特徴を捉えるためである。したがって、その量的側面は次編にゆずる。
- 12) 蔵書数は 1998 年度（但し、Y 市立図書館のみ 1997 年度）、年間の貸出冊数は 1999 年度の資料を用いた。
- 13) 開架書籍は貸出中のものが多くあるため、開架冊数は捉え難い。仮に 1 日の平均貸出冊数が 1000 冊とすれば、貸出期間 15 日で 15000 冊、児童書や AV 資料、雑誌の数を除いても 10000 冊程度が常時貸し出されていることになる。
- 14) 利用者調査は、データ数を増やし経年的信頼性を確保するため、時期を 2 回に分け調査したものである。
- 15) 利用人数の算定では、書架を見ながら本を選んだり、立ち読みしている者のみを数え、スツール等に腰掛けて読書している者はどの書架の本か不明のため、ただ通過している者や会話している者とともに除いた。類目への振り分けは、書架間の中心で行った。中心付近で判断できない場合は、両類目に 0.5 人ずつ振り分けた。
- 16) 内訳は、F 町立図書館 312 人、M 図書館 539 人、OM 市立図書館 685 人、O 市立図書館 391 人、Y 市立図書館 357 人、C 市民図書館 692 人、K 町立図書館 349 人である。
- 17) 1999 年の書籍配架予備調査の時点までは大きな変化はなかったが、2000 年に書棚長さを測定した際に、2 館で配架位置が一部変更されていた。図書館員に以前の配架位置と類目毎の書棚量が以前とほとんど変わらないことを確認した上で、変更後の書棚長さを測定した。
- 18) 小説以外の文庫本は該当する類目に分けて配架するケースが多い。したがって、ここで言う文庫本は小説である。
- 19) ＜5 技術＞は正しくは＜5 技術・工学・工業＞であり、網目は＜50 技術・工学＞に始まり、＜51 建設工学・土木工学＞＜52 建築＞＜53 機械＞・・・＜58 製造業＞と続き、最後は＜59 家政学・生活科学＞である。
- 20) ＜3 社会科学＞は＜36 社会＞＜38 風俗習慣・民俗学＞に日常生活に身近な資料が多い。
- 21) ＜7 芸術＞の網目は＜70 芸術＞に始まり、＜71 彫刻＞＜72 絵画・書道＞・・・＜78 スポーツ・体育＞と続き、最後は＜79 諸芸・娯楽＞である。＜78＞の要目は（780 スポーツ・体育）から始まり（781 体操・遊技）（782 陸上競技）・・・（786 戶外レクリエーション）・・・（789 武道）と屋外を中心としたあらゆるスポーツが範疇であり、＜79＞の要目は（790 諸芸・娯楽）に始まり（791 茶道）・・・（793 花道）・・・（795 囲碁）（796 将棋）・・・（798 室内娯楽）（799 ダンス）とむしろ室内を中心とした日常生活の趣味や娯楽的な範疇のものからなる。
- 22) 「暮らしの本棚」コーナーには＜49 医学＞＜38 冠婚・葬祭＞＜14 占い＞も数こそ少ないが含まれている。
- 23) 暮らしと福祉の特集コーナーは、（364 社会保障）（365 生活・消費者）（367 家族・男女・老人問題）（369 社会福祉）（378 障害児教育）の資料で構成されている。
- 24) ＜8 言語＞について言えば、O 館の利用人数は 9 人、貸出冊数は 2277 冊であり、他館が 4～14 人、1465 冊～5405 冊であることから必ずしも突出した利用というわけではない。しかし、書棚長さは 5220mm と他館の 1/2.3～1/6.7 と比べて短いために、利用人数比、貸出冊数比が異常に高くなったものである。
- 25) M 図書館の＜9 文学＞は低いと特に文庫本が少ないことが影響している。
- 26) ＜9 文学＞について言えば、最奥部に配架された T 館と K 館では利用人数割合がやや低かったにも関わらず貸出冊数割合は他の図書館とかわらず、この限りでは手前側か奥側かの位置にそうこだわる必要はなさそうである。

（2007 年 7 月 6 日原稿受理、2008 年 1 月 15 日採用決定）